

原著論文

Maternal Confidence を育む 看護介入プログラムの実施・評価

Practice and Evaluation of a Nursing Intervention Program to Promote Maternal Confidence

岩崎 順子 (Junko Iwasaki)*¹ 野嶋 佐由美 (Sayumi Nojima)*¹

要 約

本研究では、妊娠期と出産後1ヵ月のMaternal Confidenceを育む看護介入プログラムを実施し、プログラムの有用性の評価を目的に研究をおこなった。Maternal Confidenceを育む看護介入プログラムは「Maternal Confidenceを育む看護の姿勢」と4つの【Maternal Confidenceを育む看護介入】から構成され、妊婦9名、出産後1ヵ月の母親11名を対象にプログラムの実施、評価をおこなった。評価はMaternal Confidence看護介入評価質問紙、プログラム参加時の参加観察、および、受講後の自由記載の内容にておこなった。結果、Maternal Confidence質問紙結果は、妊娠期得点率63.8%、出産後1ヵ月得点率72.0%といずれも60.0%以上と高い結果であった。また、母親の効果的な反応や肯定的な感想がきかれており、本プログラムの有用性が示唆された。

Abstract

In this study, we implemented a nursing intervention program to promote Maternal Confidence during pregnancy and one month after childbirth, with the aim of evaluating the usefulness of the program. The nursing intervention program that promote Maternal Confidence consists of Nursing attitudes that promote Maternal Confidence and four [nursing interventions that promote Maternal Confidence.] The subjects were 9 pregnant women and 11 mothers one month after giving birth. As a result, Maternal Confidence questionnaire results showed that the scoring rate for pregnancy was 63.8%, and the scoring rate for 1 month after delivery was 72.0%. Both were highly confident with more than 60.0%. The effectiveness for the nursing intervention program was suggested.

キーワード：Maternal Confidence 看護介入 母親

I. はじめに

「健やか親子21」(2014)では、10年後に目指す姿を「すべての子どもが健やかに育つ社会」を目指している。そして、妊娠・出産・育児に関する研究領域では、Maternal Confidenceが母親となる過程に深く関与しているとして注目されている(前原, 2005; 小林, 2006; 前原, 2006; 鈴木, 2009; 小林, 2010; 前原, 2015; 小澤, 2015; 清水, 2015)。Maternal Confidenceは、母親になる過程は学習や経験により導かれるものと

して注目しており、母親になることが、先天的な要因ではなく、妊娠・出産・育児といった過程で獲得されるという理論的な根拠となっている(Mercerら, 1995; Zhar, 1991; Zhar, 1993; Mercerら, 1988; Grossら, 1994; Ruchalaら, 1997; Lowe, 1993)。Maternal Confidenceの概念は、Self-Efficacyの理論やRubinの理論から導きだされており、母親としての成長発達に関連しており、母親が母親としての行動を行うにあたって自分にその能力があるとする主観的なとらえであり、母親になる過程を導くための重要な概念である。

*¹高知県立大学看護学部

著者らはMaternal Confidenceに関する先行研究(岩崎, 野嶋, 2007)より、Maternal Confidenceは、育児に関する基本的な知識、子どもの健康の保持・増進、子どもとの生活に関する行動、子どもの理解に関する感受性、育児に関するマネージメントが重要な局面として含まれていることを明らかにした。この考えに基づいて、妊娠期における母親のMaternal Confidenceを育成する看護介入プログラムの開発をおこなった(岩崎, 野嶋, 2015)。また、Maternal Confidenceは、育児経験、児の合併症、家族のサポート等より影響を受けることや、児の合図を読みとる能力を高める援助や育児技術に関する具体的な看護介入が母親としての自信を高めることを報告した(岩崎, 野嶋, 2015)。このようにMaternal Confidenceは、育児に関する知識や行動、子どもの理解の感受性、育児に関するマネージメントといった様々な局面を含む、看護プログラムとしての具体的な看護介入がのぞまれる。Maternal Confidenceは、妊娠期のみでなく、妊娠期から出産後において母親になる過程を支え導いていく概念であり、両時期におけるMaternal Confidenceを育むプログラムがのぞまれる。そこで、本研究では、妊娠期および出産後1ヵ月の時期に注目したMaternal Confidenceを育成する看護介入プログラムを実施し、評価することを目的に研究に取り組むこととする。

II. 研究の目的

本研究では、妊娠期と出産後1ヵ月のMaternal Confidenceを育む看護介入プログラムを実施し、プログラムの有用性を評価する。

III. 研究方法

1. 対象者

県内の病院を受診し、初産婦で、妊娠経過が概ね順調な妊娠後期の妊婦9名、出産後1ヵ月の母親11名を対象とした(データ収集期間:平成26年10月~平成27年9月)。

2. Maternal Confidence看護介入プログラム

本研究においてMaternal Confidenceとは、母親

が、子どもの成長や健康に関する基本的な知識を有し、子どもとの相互作用を通して子どもの理解を深めていきながら、生活に関する行動を高め、育児における様々なマネージメントに関する主観的な捉えと定義づけた。看護介入プログラムの目標は、母親が母親としての主観的な捉えを高めると共に、子どもとの生活の中で育児行動を助け、育児に向けて前向きに、楽しくやっていけると思うことができることとした。

Maternal Confidenceを育む看護介入プログラムの構成は「Maternal Confidenceを育む看護の姿勢」と4つの【Maternal Confidenceを育む看護介入】から構成される。本プログラムでは、「Maternal Confidenceを育む看護の姿勢」をもちながら、母親の状況に合わせて4つの【Maternal Confidenceを育む看護介入】を駆使していく総合的な看護プログラムであり、4つの看護介入は、互いに関連し、高めあいながらMaternal Confidenceを育んでいく。

1) 「Maternal Confidenceを育む看護の姿勢」

妊娠期および出産後1ヵ月の母親へのMaternal Confidenceを育む看護介入プログラムでは、プログラムの前提となる考え方を8つの看護の姿勢として表している。8つの看護の姿勢とは、「母親の安心できる場をつくっていく姿勢」、「母親自身の思いや気がかり、生活の変化に注目していく姿勢」、「母親が育児において出来ていることを引き出し、保証・賞賛する姿勢」、「育児や子どもに関する母親の気づきを促進する姿勢」、「子どもとの生活と関連づけた具体的な方法について示していく姿勢」、「育児に関する母親の柔軟性を育ていく姿勢」、「母親の余裕を生み出していく姿勢」、「育児の楽しさを育ていく姿勢」であり、プログラム実施中はMaternal Confidenceを育ていくために、常に求められる姿勢である。

2) 4つの【Maternal Confidenceを育む看護介入】

Maternal Confidenceを育む看護介入は、4つの看護介入すなわち【子どもの成長と健康に関する基本的な知識を育む看護介入】、【子どもとの生活に関する行動を育む看護介入】、【子どもの理解に関する感受性を育む看護介入】、【育児に関するマネージメントを育む看護介入】から構成される。

【子どもの成長と健康に関する基本的な知識を育む看護介入】は、母親が、子どもの成長・健康に関する基本的な知識について理解し活用することができるように導いていく看護介入である。子どもの健康に関する基本的な知識（子どもの身体的特徴、子どもの五感・こころの特徴について）、子どもの成長に関する基本的な知識（子どもの成長・発達、成長・発達に応じた子どもの健康促進）についてエビデンスをもとに母親が理解できるように支援していく。

【子どもとの生活に関する行動を育む看護介入】は、子どもとの生活に関して、子どもの生活および母親の生活に関する行動を育んでいく看護介入である。子どもの生活（子どもの栄養、子どもの排泄、子どもの休息/活動）、子どもの生活を整えていく行動（子どもの特徴に応じた生活を整える行動、子どもの成長・発達に応じた生活を整える行動、子どもの安全）、子どもに応じた母親の生活に関する行動（育児中の母親の生活の変化、育児中の母親の生活の工夫）について示し、母親が日々の子どもの生活に関する行動について理解し、工夫しながら行動変容していくことができるように支援していく。

【子どもの理解に関する感受性を育む看護介入】は、母親が、子どもに注目し、徐々に子どもの個性への理解を深めることができるように支援し、子どもの特徴に応じた柔軟な育児を育んでいく看護介入である。子どもの欲求・表現の理解（子どもの成長・発達に応じた子どもの欲求、子どもの成長・発達に応じた子どもの表現、母親の子どもへの注目）、子どもの個性の理解（子どもの個性・特徴、わが子の個性の気づき、日々の生活を通じた子どもの理解）について示し、母親が子どもに注目し、子どもの個性・特徴をつかみ、理解してくことを促進していく。

【育児に関するマネージメントを育む看護介入】は、母親が育児の中で休息や気分転嫁をとりいれながら、余裕を生み出すことができるように導いていく看護介入である。育児との折り合い（日々変化してく育児、柔軟な育児、育児における折り合い）、育児中の母親の余裕（育児期間中の母親のこころの状態、母親の余裕の取入れ、積極的な休息の取入れ）について示しながら、母親自身の余裕を生みだしていくことが

できるように支援していく。

3) Maternal Confidenceを育む看護介入プログラムの運用

本プログラムは、妊娠期および出産後1ヵ月での開催とし、3～5名（出産後1ヵ月では母児3～5組）によるグループでの実施とする。プログラムは、妊娠期・出産後1ヵ月どちらか1回のみ、または両回への参加について、対象者の希望にそって開催とし、所要時間は、60～90分程度とする。プログラムでは、《Maternal Confidenceを育む看護の姿勢》を常にもちながら、4つの【Maternal Confidenceを育む看護介入】についてスライドで具体的に示していきながら実施していく。

3. Maternal Confidence看護介入プログラムの有用性の測定

1) Maternal Confidence看護介入評価質問紙

質問紙は、先行研究（岩崎、野嶋、2007）の出産後4ヵ月において信頼性・妥当性が検討されたMaternal Confidence質問紙をもとに、妊娠期および出産後1ヵ月の母親の状況に応じた質問項目となるよう文献検討を重ね検討し、Maternal Confidence看護介入評価質問紙を作成した。質問紙は、【子どもの成長と健康に関する基本的な知識】7項目、【子どもとの生活に関する行動】7項目、【子どもの理解に関する感受性】7項目、【育児に関するマネージメント】7項目、合計28項目からなる（得点範囲28-112点）。各質問項目の尺度は「ほとんど自信がない：1点」「あまり自信がない：2点」「やや自信がある：3点」「大変自信がある：4点」のリッカート尺度による4段階評価での回答を求めた。

2) Maternal Confidenceを育成する看護介入プログラムへの対象者の反応および感想

Maternal Confidence看護介入プログラム内での対象者の言動や反応について観察する参加観察をおこなった。また、プログラム終了後、参加した感想について自由記載での回答を求めた。

4. データ収集方法

本研究では、正常な妊娠後期の妊婦および出産後1ヵ月程度の褥婦を対象とした。ハイリスク群への偏りを回避するために正常な経過を

たどっている妊娠35週以降の妊婦および出産後の入院経過が順調な褥婦を施設助産師に選定していただき、その後、研究者が研究について説明し研究協力の依頼をおこなった。研究への協力が得られた対象者に対して、対象者の希望日時を優先し構成した3～5名のグループによるMaternal Confidenceを育成する看護介入プログラムを実施した。プログラム中は、対象者の言動・反応について観察する参加観察をおこなった。参加観察は、研究協力者1名が観察し記録を行うとともに、研究者は、看護介入の実施を行うことを主としながら、一部観察をおこなった。また、対象者にプログラムの実施後、参加した感想を自由に記載していただき、プログラム終了後、回収をした。

5. データ分析

本研究では、看護介入後のMaternal Confidence質問紙結果について記述統計をおこなった。統計解析ソフトは、IBM SPSS Statistics25を用いた。Maternal Confidence看護介入評価質問紙は、得点率60%以上を自信高群として分析をおこなった。また、参加観察で得られた対象者の反応について4つの【Maternal Confidenceを育む看護介入】を軸に記述し、質問紙の自由記載については意味、内容について要約しカテゴリー化をおこなった。

6. 倫理的配慮

倫理的配慮として本研究の実施にあたっては、高知県立大学研究倫理審査委員会に申請し、承諾を得るとともに対象施設での倫理審査委員会の承諾も得た。対象者に対しては文章および口

頭で研究の目的と主旨を説明し、自由意志での参加であること、途中、中断や撤回が可能であるとともに、それに伴う不利益を被ることはないこと、プライバシーの保護、対象者への心身の負担の軽減への配慮をおこなった。

IV. 結 果

1. 対象者の概要

妊娠期のMaternal Confidenceを育成する看護介入プログラムへの参加者は、9名であった。対象者の妊娠週数は平均34.78週(34～35週)であり、切迫流早産既往の既往のある者が2名いた。また、出産後1ヵ月のMaternal Confidenceを育成する看護介入プログラムへの参加者は、11名であった。出産後の日数は、平均40.82日(14～74日)であり、帝王切開での対象者が4名いた。妊娠期および出産後1ヵ月の両プログラムに参加した対象者が4名いた。

2. Maternal Confidence質問紙結果

1) 妊娠期 Maternal Confidence

(1) Maternal Confidence看護介入評価質問紙得点結果

妊娠期におけるMaternal Confidence看護介入評価質問紙結果について表1に示す。妊娠期のMaternal Confidence看護介入評価質問紙合計平均得点(獲得得点の割合)は、71.44点(63.8%)であった。【子どもとの生活に関する行動】19.56点(69.8%)と最も高い結果であり、【子どもの成長と健康に関する基本的な知識】15.56点(55.7%)と最も低い結果であった。

表1 妊娠期のMaternal Confidence質問紙得点結果

Maternal Confidence	妊娠期 (n=9)			
	Mean	±SD	Range	得点率
【子どもの成長と健康に関する基本的な知識】	15.56	±3.97	10-22	55.7%
【子どもとの生活に関する行動】	19.56	±2.96	16-25	69.8%
【子どもの理解に関する感受性】	18.22	±4.52	12-25	65.1%
【育児に関するマネジメント】	18.11	±2.98	13-21	64.7%
合計得点	71.44	±13.01	58-91	63.8%

(2) Maternal Confidence看護介入評価質問項目結果

妊娠期のMaternal Confidence看護介入評価質問紙28項目のうち、上位5項目の高得点項目(表2)および下位5項目の低得点項目(表3)について示す。母親の子どもへの語りかけの大切さといった【子どもの成長と健康に関する基本

的な知識】に関する項目や、母親の生活調整や安全な行動といった自ら実践できている【子どもとの生活に関する行動】の項目に関して高い結果であった。一方、子どもの沐浴や子どもの生活リズムの作成、子どもの排泄など、未体験の【子どもとの生活に関する知識】に関する項目は低い結果であった。

表2 妊娠期のMaternal Confidence 高得点項目(上位5項目)

	質問項目	Mean	±SD	Range
7	母親が子どもに語りかけることの大切さについて知っている【知識】	3.00	±0.71	2-4
11	妊娠中の心身の変化にあわせて自分の生活を調整することができる【行動】	3.00	±0.71	2-4
14	腹部の増大に伴い安全な環境に気をつけることができる(段差、危険物の回避など)【行動】	3.00	±0.71	2-4
15	子どもの胎動についてわかる【感受性】	3.00	±0.76	2-4
24	自分の健康がすぐれない時、体調に応じて対応することができる(休息・受診行動など)【マネジメント】	3.00	±0.50	2-4

表3 妊娠期のMaternal Confidence 低得点項目(下位5項目)

	質問項目	Mean	±SD	Range
2	子どもの沐浴(お風呂)をやめたほうがいい時について知っている【知識】	1.89	±0.78	1-3
4	子どもの生活リズムをつくっていく方法について知っている【知識】	2.00	±0.71	1-3
3	自分は母親として余裕がある【マネジメント】	2.00	±0.71	1-3
1	子どものおしっこやうんちの性状、回数について知っている【知識】	2.10	±0.60	1-3
6	子どもにとっての過ごしやすい室内の環境(温度・湿度・日当たり・風通しなど)について知っている【知識】	2.10	±0.60	1-3

2) 出産後1ヵ月 Maternal Confidence
(1) Maternal Confidence看護介入評価質問紙得点結果
出産後1ヵ月のMaternal Confidence看護介入評価質問紙結果について表4に示す。出産後1ヵ月のMaternal Confidence看護介入評価質問

紙合計平均得点(獲得得点の割合)は、80.59点(72.0%)であった。【子どもとの生活に関する行動】21.50点(76.8%)と最も高い結果であり、【育児に関するマネジメント】19.36点(69.1%)と最も低い結果であった。

表4 出産後1ヵ月でのMaternal Confidence質問紙得点結果

Maternal Confidence	出産後1ヵ月 (n=11)			
	Mean	±SD	Range	得点率
【子どもの成長と健康に関する基本的な知識】	20.18	±3.54	15-26	72.1%
【子どもとの生活に関する行動】	21.50	±3.91	16-27	76.8%
【子どもの理解に関する感受性】	19.55	±3.50	14-25	69.8%
【育児に関するマネジメント】	19.36	±3.93	13-25	69.1%
合計得点	80.59	±13.32	61-99	72.0%

(2) Maternal Confidence看護介入評価質問項目結果

出産後1ヵ月のMaternal Confidence看護介入評価質問項目28項目のうち、上位5項目の高得点項目(表5)および下位5項目の低得点項目(表6)について示す。子どもの排泄に関してや子どもへの語りかけの大切さといった【子どもの成長と健康に関する基本的な知識】に関する項

目や、子どもの授乳、おむつ交換など日々の生活の中で実践している【子どもとの生活に関する行動】に関する項目について高い結果であった。また、子どもの生活リズムの作成といった【子どもの成長と健康に関する基本的な知識】や母親としての余裕、こころの安定などといった【育児に関するマネージメント】に関する項目は低い結果であった。

表5 出産後1ヵ月のMaternal Confidence 高得点項目(上位5項目)

	質問項目	Mean	±SD	Range
1	子どものおしっこやうんちの性状、回数について知っている【知識】	3.36	±0.67	2-4
7	母親が子どもに語りかけることの大切さについて知っている【知識】	3.36	±0.67	2-4
8	子どもに授乳することができる【行動】	3.36	±0.67	2-4
32	子どものおむつを交換するときに声かけをおこない、子どもの感覚を育てることができる【行動】	3.36	±0.67	2-4
13	子どもをあやすことができる【行動】	3.18	±0.75	2-4

表6 出産後1ヵ月のMaternal Confidence 低得点項目(下位5項目)

	質問項目	Mean	±SD	Range
4	子どもの生活リズムをつくっていく方法について知っている【知識】	2.18	±0.60	1-3
27	自分は母親として余裕がある【マネージメント】	2.45	±0.82	1-4
10	子どもと自分にあった(応じた)育児方法を工夫してとりいれることができる【行動】	2.55	±0.69	2-4
22	様々な育児に関する情報の中から自分と子どもにあった必要な情報を判断し選択することができる【マネージメント】	2.55	±0.69	2-4
23	自分の心を穏やかに保つことができる【マネージメント】	2.64	±0.50	2-4

3. Maternal Confidenceを育成する看護介入プログラムの対象者の反応および感想

1) Maternal Confidenceを育成する看護介入プログラムへの対象者の反応

参加観察の結果、対象者の4つの看護介入への様々な反応がみられた。

【子どもの成長と健康に関する基本的な知識を育む看護介入】では、妊娠期、胎児モデルを用いた説明に対して対象者は、興味をもって前のめりになって自ら触る場面がみられ、児の発達に関して「すごい」と驚きながら成長を感じており、児の成長・発達に関する理解につながっていた。出産後1ヵ月では、各対象者、子どもの健康に関する気がかかりや、現在の育児で困っている具体的な内容に関して積極的に質問が聞

かれた。他の対象者の質問や育児の語りに対して、それぞれ対象者は、熱心に耳を傾けており、共感しながら、更にわが子のことと関連付けて質問が繰り返されていく場面がみられており、知識の理解を通して現在の育児の気がかかりについて解決するとともに子どもの成長・発達を楽しむにとらえることができていた。

【子どもとの生活に関する行動を育む看護介入】では、妊娠期、育児の技術体験を通して対象者は、研究者の技術デモを模倣しながら取り組んでおり、手際よく実施できる対象者と時間をかけて実施する対象者がみられ「大変ですね」「できた」などの様々な反応がみられた。また、「赤ちゃんの人形を抱っこしたりオムツを換えたりすることで(赤ちゃんに)会えるのが楽しみ

になった」など児に会えることへの期待の高まりにつながっていた。出産後1ヵ月では、育児行動が徐々にできていることに関して、それぞれ大きくうなずきながら聞かれており、母親自身の育児行動の成長について気づくことができていた。

【子どもの理解に関する感受性を育む看護介入】では、妊娠期、対象者は興味をもって、スライドを熟視しており、新生児の特徴やニーズについて理解できていた。出産後1ヵ月では、わが子の様子や特徴について生活の中での場面をふまえて、各対象者は、生き生きと語られており、母親は、わが子の特徴についてとらえ、理解し実感することができていた。

【育児に関するマネージメントを育む看護介入】では、妊娠期、「うまくいなくて当たり前」、「いらいらせず、余裕をもって育てていきたい」等の発言がきかれており、育児への柔軟な心構えの形成につながっていた。出産後1ヵ月では、教育内容を通して「自分の心の余裕が大切です」「楽しんでやっていきたい」などの発言が多くきかれており、母親の余裕を持った育児の重要性、生活の調整について理解できていた。

2) Maternal Confidenceを育成する看護介入プログラムに対する感想

質問紙における自由記載の分析の結果、両プログラムとも看護介入により対象者は「不安や疑問も解決でき少し自信をもてた」など疑問の解決や育児への気がかりの解決につながり自信を高めることができていた(表7、8)。出産後

表7 妊娠期のMaternal Confidenceを育成する看護介入プログラムの感想

カテゴリー
現在抱えている不安・疑問の解決(3)
育児への手がかりの獲得(3)
育児への柔軟な心構えの形成(3)
自分自身を尊重した育児(3)
孤立せず積極的にサポートを獲得していく育児(3)
育児への自信の形成(2)
胎児の成長の実感(1)
児に会えることへの期待の高まり(1)
育児のイメージ形成(1)

() 内は回答人数

1ヵ月の看護介入プログラムでは「悩んでいるのは自分だけではないということがわかり気持ち楽になった」といった感想がきかれており参加者である母親同士の交流により安堵や自信の獲得につながっていた。

V. 考 察

1. Maternal Confidenceを育む看護介入プログラムの有効性

本研究において、Maternal Confidence看護介入評価質問紙の合計得点は、妊娠期得点率63.8%、出産後1ヵ月得点率72.0%と、得点率は60%以上であり、Maternal Confidence 高群であった。本看護介入プログラム参加による対象者の反応、感想ではいずれも肯定的な結果がみられており、Maternal Confidenceの各局面への看護介入を含んだ本プログラムは有用であったと考える。

以下にMaternal Confidenceの4つの看護介入プログラムおよび看護の姿勢の有効性について検討していく。

1) 【子どもの成長と健康に関する基本的な知識を育む看護介入】

【子どもの成長と健康に関する基本的な知識を育む看護介入】は、妊娠期得点率55.7%と低い結果であり、質問項目では、沐浴中止や子どもの生活リズム、子どもの排泄、環境に関する質問項目において低い結果であり、妊娠期では、子どもの成長や健康に関する具体的な知識について自信をもてずにいる。一方、出産後1ヵ月

表8 出産後1ヵ月のMaternal Confidenceを育成する看護介入プログラムの感想

カテゴリー
育児体験者の語りを通じた安堵(6)
育児への気がかり事項の解決(3)
育児知識・技術の獲得(3)
あるがままでゆとりのある育児(3)
育児への自信の形成(2)
同じ時期にある母親および児との交流の機会(2)
これまでの妊娠・出産・育児体験の振り返り・想いの想起(2)
周囲へのサポートの積極的な依頼の重要性(2)
語りやすい雰囲気・環境の中での学級への参加(2)

() 内は回答人数

では、子どもの排泄に関する知識の項目は、最も高い得点項目となっていた。子どもの排泄や沐浴中止等の具体的な知識について、出産後の日々の育児における自らの体験を通して知りえた子どもの健康に関する知識が、母親の自信となっていた。三浦ら（2005）は、妊婦の母親学級に望む知識として分娩に関する事項とともに「胎児の状態」「新生児について」をあげており、妊娠中より、新生児についての知識欲求が高いことを報告している。子どもの成長と健康に関する知識を育んでいくためには、基本的な知識に関する内容とともに、実際の児の成長と健康とを関連付けながら理解を育んでいく看護介入が有効であり、Maternal Confidenceを高めていくと考える。

2) 【子どもとの生活に関する行動を育む看護介入】

【子どもとの生活に関する行動を育む看護介入】は、妊娠期得点率69.8%、出産後1ヵ月76.8%と最も高い得点結果であった。質問項目では、妊娠期での生活の調整に関する行動、出産後1ヵ月での子どもへの授乳、おむつ交換、あやす等の項目は、高い得点結果であり、実際に体験し、身につけている行動について、母親は、自信をもつことができていた。田端ら（2005）は、育児演習型母親学級の効果に関する研究において「抱き方」「おむつ交換」「沐浴」等の演習をおこなった対象者のほうが、産後1ヵ月での「おむつ交換」「抱き方」についての自信が高いことを報告している。本プログラムでも妊娠中のモデル人形を用いた育児行動に関して、対象者は、積極的に実施できており、育児行動に関する実際の体験が自信につながっていた。子どもとの生活に関する母親の行動に注目し、生活の中で母親が実際に行動変容・工夫していく力を高めることができるように支援していく看護介入は有用であり、Maternal Confidenceを高めていく。

3) 【子どもの理解に関する感受性を育む看護介入】

【子どもの理解に関する感受性】は、妊娠期得点率65.1%、出産後1ヵ月得点率は69.8%であった。出産後「母親は児がなぜ泣いているのかわからない」「どのように対応したらよいのかわからず困惑している」と多くの先行研究に

て報告されている（池添，2018）（久世，2013）。本プログラムでは、子どもの理解に関する感受性に関して子どもの欲求・表現や個性の理解に関する教育内容を含んでおり、母親が児を理解することを促進する内容となっている。プログラムへの参加時、対象者は、わが子の様子について生き生きと語る場面がみられており、子どもの個性の理解につながっていた。前原（2006）もわが子の合図をよみとる感受性を高める看護援助として「わが子の表情・行動・生理的反応への気づきを促す」「新生児期の行動特徴の理解を深める」等が有用であることを報告している。現在のわが子の欲求や表現方法について母親と共にひも解いていき、解釈し、母親自身が子どものことがわかるように支援する本看護介入は有用でありMaternal Confidenceを高めていく。

4) 【育児に関するマネージメントを育む看護介入】

【育児に関するマネージメント】は、妊娠期得点率64.7%、出産後1ヵ月得点率69.1%であった。質問項目では「自分は母親として余裕がある」の項目は妊娠期・出産後1ヵ月共に低い結果であり、さらに出産後1ヵ月では「自分の心を穏やかに保つことができる」の項目も低い結果であった。但馬ら（2019）は、産後早期において母親の連続睡眠は約3～6時間であり、産後の主観的睡眠満足度は「とても不満」「やや不満」が約60%を占めていることを報告している。母親は、妊娠・出産・育児にともない、心身ともに疲れており余裕をもてずにいる。プログラムへの参加により対象者からは「自分自身を尊重した育児、あるがままでゆとりのある育児の大切さへの気づき」に関する意見が多くきかれていたものの、母親自身の余裕にまでは至っておらず、更に継続した支援の中で、母親が育児の中で休息や気分転換をとりいれながら、余裕を生み出すことができるように導いていきMaternal Confidenceを高めていくことがのぞまれる。

5) Maternal Confidenceを育む看護の姿勢

本プログラムでは、プログラムの前提となる考え方を8つの看護の姿勢として表している。プログラム参加後の対象者の感想に「語りやすい雰囲気・環境の中で学級に参加できた」との

意見が聞かれており「母親の安心できる場をつくっていく姿勢」として、待つ、そっと助言を行う等の支援をおこない安心を保証していく姿勢が重要である。また、日々育児に追われながら様々な気がかりを抱えている対象者に、「母親自身の思いや気がかり、生活の変化に注目していく姿勢」、「母親が育児において出来ていることを引き出し、保証・賞賛する姿勢」、「育児や子どもに関する母親の気づきを促進する姿勢」は、感想にきかれた「育児への気がかり事項の解決」につながるとともに「母親の柔軟な心構えの形成」へと導いていくことができる重要な姿勢であるといえる。また、日々の状況に応じて柔軟に余裕を意識してもちながら育児を行うことができるように「子どもとの生活と関連づけた具体的な方法について示していく姿勢」、「育児に関する母親の柔軟性を育ていく姿勢」、「母親の余裕を生み出していく姿勢」、「育児の楽しさを育ていく姿勢」をもつことが「あるがままでゆとりのある育児」「育児への自信の形成」につながっていた。これらの8つの看護の姿勢はMaternal Confidenceを育ていくうえで根底となる重要な姿勢であり、4つの看護介入を実施していくなかで常に求められる姿勢である。

VI. 結 論

本研究では、妊娠期および出産後1ヵ月の母親を対象にMaternal Confidence看護介入プログラムを実施し評価をおこなった。Maternal Confidence質問紙による結果は、妊娠期得点率63.8%、出産後1ヵ月得点率72.0%といずれも60.0%以上と自信高群であった。また、参加観察では母親の効果的な反応がみられており、看護介入プログラムの有用性が示唆された。

VII. 本研究の限界と今後の課題

本研究では、妊娠期および出産後1ヵ月の対象者共にハイリスク群が多かったこと、対象者への心身の負担を考慮し看護介入実施前での質問紙調査をおこなっていないことなど、本研究の限界があげられる。また、Maternal Confidence

看護介入質問紙においても今後、信頼性・妥当性の検証がのぞまれる。今後、更に対象者をひろげ、Maternal Confidence看護介入プログラムの実施・評価をおこない、実践で活用可能な看護介入プログラムへの洗練化がのぞまれる。

謝 辞

本研究にご協力いただきました皆様に深く感謝いたします。妊娠後期および出産後のお忙しい時期に研究へのご協力をいただきましたお母さま方に、心から感謝いたします。

この論文は平成24-26年度科学研究費助成事業（基盤研究（C）・課題番号24593393）の助成を受けておこなったものである。なお本研究において申告すべき利益相反事項はない。

<引用文献>

- Gross,D. Rocissano,L & Roncoli,M (1989). Maternal Confidence during toddlerhood, Comparing preterm and fullterm groups,Research in Nursing&Health, 12-19.
- Gross,D & Tucker,S (1994). Parenting Confidence During Toddlerhood, Nurse Practitioner, 25, 29-34.
- 池添紀美代, 井上美智子, 藤川シズ子他 (2018). 香川県の助産師による乳児家庭全戸訪問の母親評価と育児支援課題 平成20年調査と平成28年調査の比較から, 香川母性衛生学会誌, 18(1), 9-70.
- 岩崎順子, 野嶋佐由美 (2007). Maternal Confidence と家族サポートの関連, 家族看護5(1), 100-110.
- 岩崎順子, 野嶋佐由美 (2015). 乳児を抱える母親のMaternal ConfidenceおよびMaternal Confidenceを育成する看護介入に関する文献検討. 高知女子大学看護学会誌, 40(2), 125-131.
- 岩崎順子, 野嶋佐由美 (2015). 妊娠期の母親のMaternal Confidenceを育成する看護介入プログラムの開発. 高知女子大学看護学会誌, 41(1), 52-62.
- 小林康江 (2006). 産後1ヵ月の母親が「できる」と思える子育ての体験. 母性衛生, 47(1), 117-124.

- 小林康江 (2010). 日本語版「母親としての自信質問紙 (Maternal Confidence questionnaire)」の信頼性妥当性の検討. 山梨県母性衛生学会誌, 9(1), 34-40.
- 厚生労働省 (2014). 「健やか親子21」の次期計画について検討報告書, 厚生労働省ホームページ, rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/pdf/saisyuuhyouka2.pdf.
- 久世恵美子 (2013). 産後1ヵ月の母親が体験する育児の出来事と対処. 岡山医療生協医報, 2, 21-25.
- 前原邦江 (2005). 産褥期の母親役割獲得過程母子相互作用の経験を通して母親役割の自信を獲得していくプロセス. 日本母性看護学会誌, 5(1), 31-37.
- 前原邦江, 森恵美 (2005). 産褥期における母親役割の自信尺度と母親であることの満足感尺度の開発. 信頼性・妥当性の検討, 千葉大学看護学部紀要, 27, 9-18.
- 前原邦江 (2006). わが子の合図をよみとる感受性を高める看護援助 産褥早期の母子相互作用のアセスメントから. 母性衛生, 47(2), 429-438.
- 前原邦江, 森恵美, 土屋雅子他 (2015). 出産施設を退院後から産後1ヵ月までに母親役割の自信が高まる要因 高年初産婦と34歳以下初産婦を比較して. 母性衛生, 56(2), 264-272.
- Mercer,R,T, Ferketich,S,L, Joseph,J else (1988). Effect of Stress on Family Functioning During Pregnancy, Nursing Research, 37(5), 268-275.
- Mercer,R,T & Ferketich,S,L (1995). Experienced and Inexperienced Mother's Maternal Competence During Infancy. Research in Nursing & Health, 18, 333-343.
- 三浦香奈子, 田上晶子 (2005). 妊婦が求める母親学級への改善にむけて. 仙台市立病院医学雑誌, 25, 105-108.
- Nancy,K,Lowe (1993). Maternal Confidence for Labor. Deveropment of the Childbirth Self-Efficacy Inventory, Research in Nursing&Health., 16, 141-149.
- 小澤治美, 坂上明子, 森恵美他 (2015). 産後1ヵ月間の母乳育児推進及び母親役割の自信を高めるための看護介入におけるシステムティックレビュー 日本の高年初産婦への適用に向けて. 千葉大学大学院看護学研究科紀要, 37, 17-26.
- Ruchala PL (1997). Social support, knowledge of infant development, and Maternal Confidence among adolescent and adult mothers, Journal of Obstetric, Gynecologic & Neonatal Nursing, 26(6), 685-689.
- 鈴木由紀乃, 小林康江 (2009). 産後4か月の母親が母親としての自信を得るプロセス. 日本助産学会誌, 23(2), 251-260.
- 清水嘉子 (2015). 生後1歳6カ月の子どもをもつ母親の育児への自信. 小児保健研究, 74(3), 453-459.
- 田端五月, 松浦和代, 野村紀子 (2005). 育児演習型母親学級の効果に関する研究. 日本母性看護学会誌, (5)1, 61-69.
- 但馬まり子, 川添香, 中西敬子ら (2019). 初産婦の産後3日目から2週間健診までの生活リズム移行期における睡眠状況と疲労感の実態. 母性衛生, 59(4), p646-654.
- Zhar,L, (1991). The Relationship between Maternal Confidence and Mother-Infant Behaviors in Premature Infants. Research in Nursing & Health, 14, 279-286.
- Zhar,L (1993). The Confidence of Latina Mothers in the Care of Their Low Birth Weight Infants. Research in Nursing & Health, 16, 335-342.